＜研究論文＞

千葉県佐倉市山崎貝塚とその土器

－印旛沼周辺における条痕文系土器群の変遷－

阿　部　芳　郎

はじめに

ここに紹介する資料は、千葉市内に在住の郷土史研究家として著名であった助川寛氏がかつて採集され、氏の逝去後に千葉市加曽利貝塚博物館に寄贈されたものである。氏は生前に千葉県の諸遺跡の踏査を行われ、同時に全国各地に探査の手をひろげられた。寄贈資料には東北地方から北海道におよぶ多数の遺跡から採集されたものがあり、これらの膨大な資料はやがて加曽利貝塚博物館において整理報告されるはずである。

筆者はこうした膨大な資料の数々を1981年に観察したが、その際に土器内面に「昭和14年、佐倉市山崎貝塚出土」と注記された本資料の存在に気付き、その時に該当遺跡の探索にあたったが、現在までに作成された遺跡分布図や遺跡登録台帳に山崎貝塚の名をみつけることができず、不審に思った（註１）。

その後ふたたび本資料の観察と整理を行い、資料の公表を計画した際に、木箱の片隅に土器片とともに山崎貝塚の調査を伝える昭和14年の新聞記事の切り抜きが発見され、本資料が発掘調査によって得られたものであることがわかり、調査後に公表されることなく、ふたたび埋もれてしまった本資料の重要性を知ることになった。

寄贈資料には大型の破片が多く、またそのなかのいくつかは氏の手によって接合と補修がほどこされていた。こうした資料は早期後半の条痕文期の遺跡が多いとされる印旛沼周辺においてもなお少ない資料であり、今後の当該土器研究に資するところが大きいものと思われる。また、こうした資料を出土した遺跡の調査の成果を広く公表する意義も少なからずあろうかと思うのである。

本論では昭和14年の調査以後にふたたび埋もれてしまった本資料の紹介を行うとともに、当該地域の条痕文系土器群の変遷についてまとめ、この資料のもつ特質について考えを巡らせてみることにする。

Ⅰ　資料の分類と整理 ―２つの山崎貝塚―

助川氏の調査地点は、遺跡名とともにその位置が文献の検索により知ることができなかったため、土器内面の注記と当時の調査を伝える昭和14年の新聞記事が主な手がかりとなった。

千古の夢を刻む
南國模様の土器
珍らしや・内郷で發見

アイヌ先住民族
研究に新な話題

第１図　山崎貝塚の調査を伝える当時の新聞（読売新聞　昭和14年１月20日）

寄贈資料のなかに山崎貝塚の注記のみえるものは、今回取り上げた条痕文系土器群の他に後期の加曽利Ｂ式から安行１式までを含む土器、石器、骨角器、自然遺物がある。しかしこれらはいずれも調査時期が昭和11年の５月10日から８月16日にわたることや、唯一調査の成果の公表された新聞記事には縄文早期の条痕文土器のみが紹介されていたことから推して、「山崎貝塚」は縄文早期の条痕文期の単時期の貝塚であり、これらの資料は別遺跡のものと判断された。全ての資料の整理が終了していないため、これらの縄文後期の山崎貝塚の現在の位置を判断することは危険であるが、後期山崎貝塚は現在の岩名天神前貝塚に該当するものと推測される。これらの資料については調査地点の確認とともに後日に公表の機会を持ちたいと思う。

今回紹介する条痕文土器は１箱の木箱とブリキ製の缶に収納され、表に山崎貝塚茅山式と注記されており、他の遺物を殆ど含んでいなかった。そしてこれらの資料のなかでも特に大型の土器片の内面には注記が行われていた。これらは良く観察すると２度にわたり行われており、はじめの注記は極細の筆かペン描きによるもので、昭和14年１月、５、12日と佐倉内郷村、また□□貝塚発掘と記されている。貝塚の名称はその後の注記により墨で消され、これらの注記の上に佐倉山崎貝塚と大文字でペン描きが施されている。こうしたことから、山崎貝塚の名は発掘当初には命名されておらず、何らかの別名が記されていたものとも想像できる。いくつかの墨消し部分の下文字が助川貝塚と読めることから、おそらく自身の名をもって記したものかも

しれない。

「山崎貝塚」の名が当時の新聞記事には用いられていないことや、記事には昭和11年12月に「同地区付近の貝塚より男系有髭土偶を発掘」したとあり、付近に後期から晩期の貝塚が存在したことが推測できる事から、昭和11年に山崎貝塚の注記のある後期の貝塚（岩名天神前貝塚）を調査し、この遺跡の資料との混同を避けたものと推測すると矛盾はしない。

2度目の注記で山崎貝塚と書き直しをおこなったのは、昭和11年調査の「後期山崎貝塚」が、その後に岩名天神前貝塚として広く周知化したためと思われる。助川氏が昭和10年前後に印旛沼周辺の遺跡を集中的に踏査したらしいことは、これに前後する日付の注記をもつ江原台遺跡の大量の遺物が寄贈資料のなかに含まれることからも窺い知ることができる。

Ⅱ　山崎貝塚の調査とその位置

助川氏の調査地点を推定する手がかりは、昭和14年の新聞記事と土器内面の注記のみである。「山崎貝塚」の発掘を伝える昭和14年の新聞記事には、佐倉市内郷村の山林内にあらたに発見されたと記されており、当時の村名を調べることによって遺跡のおおよその位置は推定されたが、詳細な地点については先述したように、周知の遺跡として登録されていないため、あらためて踏査をおこなう必要があった。

また、踏査の際に佐倉市内在住の北詰栄男氏から当時の状況を伺うことが出来たのは幸いであった。北詰氏は当時より印旛沼周辺地域の考古学的調査を推進された地域研究者として著名であったが、助川氏の調査地点をも記憶されていた。また出土品が当時の展示会に出品された

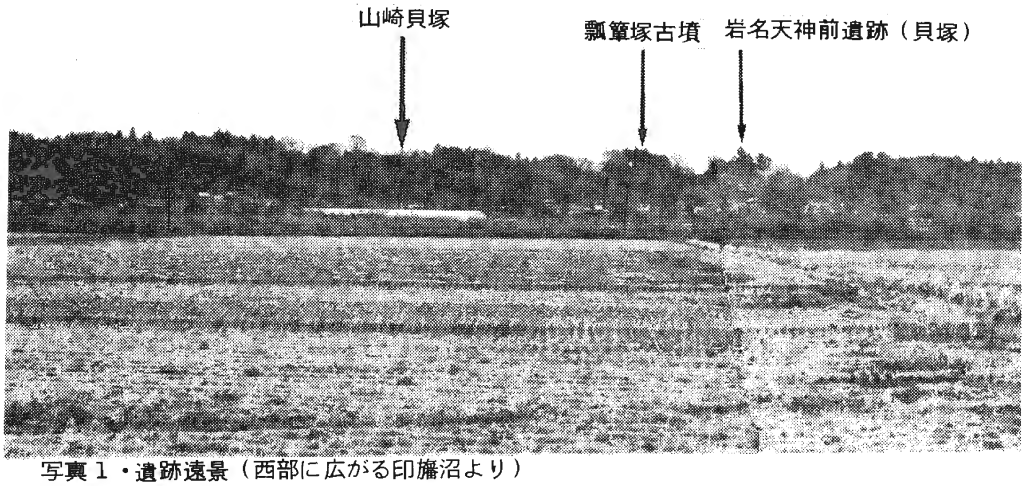
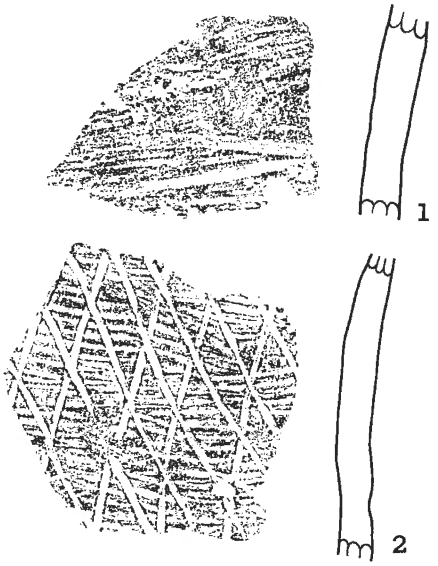


写真１・遺跡遠景（西部に広がる印旛沼より）
印旛沼周辺は標高２０～２５ｍの平坦な台地が広がり下総台地の一部を形成するが、台地端部は急な斜面や崖となる部分が多い。成田砂層を基盤層とするこの台地は土砂の流出が顕著であり、浸食の発達した樹枝状の小支谷が発達している。条痕文期の遺跡はこうした特徴をもつ台地の端部に多く残されている。現在でも山林となっている部分が多く、今後当該期の貝塚が発見される可能性は充分ある。

写真２・遺跡推定地域近景（西方より）
昭和14年当時は山林であった遺跡も土取りにより削りとられ、貝層部分はすでに破壊されている。現在崖となっている部分では、崖面の一部に条痕文土器をともなう遺構と包含層が露出している。また崖下の崩落土砂のなかに貝層の流出部分が発見された（矢印）。
崖の両側にひろがる山林に当時の遺跡の状況が偲ばれる。

おり、実見されたこともあったという。

北詰氏の指摘された地点は、地籍では山崎の北隣にあたる佐倉市下根に含まれるものであって、遺跡名は正確には「下根」にあたるという。北詰氏によると調査地点はその後に崖となり、貝塚の大半は消失したらしいとのことであった。遺跡の位置を確認するために現地を訪れたのは1989年12月29日であった。北詰氏の指摘された崖面は印旛沼を西面に望む台地の一角にあたり、その前面には主要地方道佐倉・印西線が北走する（第３図２）。



第２図　崖面および崩落土採集遺物（½）
（１・崖面採集　２・崩落土貝層周辺採集）

崖部分の地番は不明であるが、崖下の道路に面して広がる住宅は、佐倉市下根 278～279 にわたる。崖は約20～25mの高さで、下底面は現水田面と大差はない。崖上および周辺の山林内には削平整地面があり、また一部に土塁状の土盛りがある。台地上は畑となるが、わずかに条痕文土器の破片と土師器片が採集された。

崖面は現在雑木が生い茂り、断面の観察が容易ではなかったが、その南部分に土層の堆積が観察できる部分があった。この部分で関東ローム層上に堆積した焼土粒子を多く含む暗褐色土層の堆積が確認され、この層より条痕文土器を発見することができた（第２図１）。こうした状況は条痕文期の遺構断面と推測されたが、目的の貝層は存在し

なかった。また注意されるのは、この層より上に数枚のローム層と黒色土が交互に堆積した一種の版築面が発見され、この断面より施釉陶器の鉢が発見された。こうしたことから、周辺の台地は中世の館址か城郭の一部を成すらしいことが推測される。縄文早期の包含層は、こうした整地面の下に存在したのである。

一方崖下には一部に崩落土砂の堆積があり、先述した条痕文土器の包含層の露出する地点の下方の土砂には、ハイ貝・ハマグリ・カキが散布しておりカキの内面には灰がつまっていた。これらの貝種は印旛沼周辺の条痕文期の貝層を構成する主体的な貝類であり、また貝類とともに条痕文土器（第２図２）が採集されたことから、これらの貝類が「山崎貝塚」の貝層部分であった可能性が強い。こうした事から「山崎貝塚」の貝層部分は、すでにこの土砂の崩落により消失したものと推測される。

貝塚の存在したであろう地点はこうした事から下根の台地の西側端部付近と推測され、調査当時は現在周辺にのこる雑木林と同様の山林であったのであろう。木々の間からは西方にひろがり輝く印旛沼の湖面が望めたのかもしれない。

Ⅲ　遺跡の環境

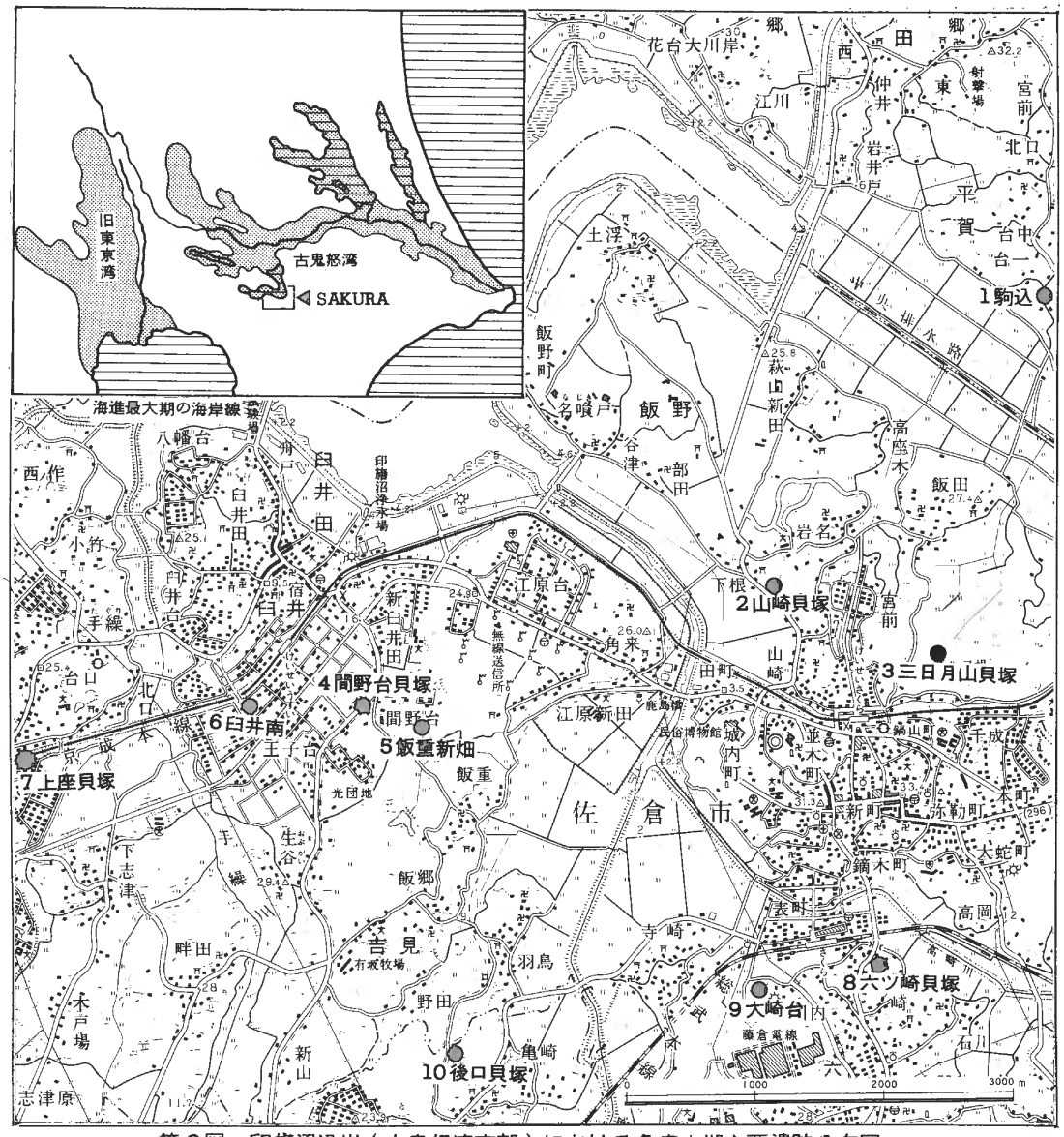
山崎貝塚は前述したように、印旛沼の南東部に面した台地上に位置し、眼下に印旛沼を見下ろす台地の端部がその中心であったらしい。

印旛沼周辺は、縄文時代早期終末から顕著となる気候の温暖化による海水面の上昇にともなって鹹水化が進み、山崎貝塚の形成された早期終末の条痕文期には古鬼怒湾の南東部分を形成していた（第３図左上）。この時期の貝塚は、ハイガイやハマグリ、カキといった鹹水産の貝類によって形成されていることはその事を暗示している。条痕文期はそうした意味から印旛沼周辺における貝塚形成の初期段階ともいえよう。

このような環境の多様化を反映するかのように、当該地域には多くの条痕文期の遺跡が分布している。とくに山崎貝塚の位置する印旛沼南岸周辺においては西方約１㎞に北詰栄男や伊藤和夫により調査された三日月山貝塚（第３図３）が存在する（註２）。また鹿島川を挟んだ西側の地域には、和島誠一・酒詰仲男らにより調査され、古くより著名な間野台貝塚(4)（註３）明治大学考古学研究室により調査された上座貝塚(7)（註４）が位置し、またこれらに飯重新畑遺跡(5)（註５）、臼井南遺跡(6)（註６）等が集中して遺跡群を形成している。さらにこれらの南方には近年筆者らが新たに発見した後口貝塚(10)（註７）がある。

後口貝塚の東側対岸には古くよりその存在が知られた六つ崎貝塚（註８）があり、近年調査された大崎台遺跡Ｃ地区にはこの時期の炉穴群が発見されている（註９）。

一方、印旛沼北岸には一本松貝塚や駒込遺跡（第３図１）、吉田馬々台遺跡などが、同様に湖岸に面して立地している。



第３図　印旛沼沿岸（古鬼怒湾東部）における条痕文期主要遺跡分布図

これらの遺跡は炉穴のみから成るものと炉穴と竪穴住居から構成されるものがある。竪穴住居の検出された遺跡は、間野台貝塚・上座貝塚・飯重新畑遺跡・駒込遺跡等があり、これらは１～２軒の住居と炉穴群から構成されている。

その両者にも貝塚の形成はあるらしいが、貝塚の多くは貝層堆積の大きい面貝層をつくるものはめずらしく、大半が規模の小さいブロック状貝層である。山崎貝塚もこうした周辺遺跡の規模や構成をもとにすると、恐らく貝層は遺構の内部に堆積した規模の小さいものであった可能性が高い。印旛沼周辺地域は以上に概観したように、早期終末の条痕文期の遺跡が群集する核的な地域であったことが推測されるのである。

Ⅳ　出土土器の分類

２つの整理箱に収納されていた遺物はすべて土器片であり、総数58点を数える。そのなかには助川氏によって接合、補修が施されたものが５個体あり、そのうちの２点の大型破片は昭和14年の新聞記事の写真に紹介されたものである（第１図）。

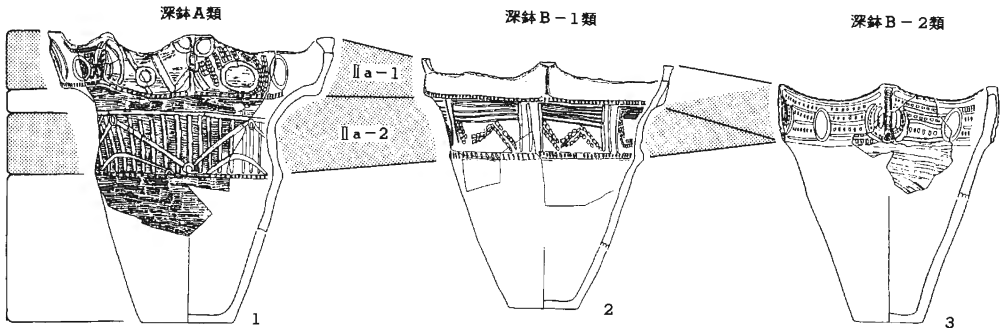
収納されていた土器片は、今回の整理によって新たに接合できたものも多い。資料群全体の特徴としては、接合率の高い有文土器が多い傾向があり、大型破片から個体復元のできたものは12個体におよぶ。またこれらのなかには内外面に白色のカルシウムの付着したものもみられ、全体に磨滅したものが少なく、遺存状況が良好であることから、資料の大半は貝層中あるいはその周辺から出土したものと推測される。

文様の明確な土器片については細片をのぞいて大半を資料化した。出土土器は大別して２群に分類され、さらに文様の細部の特徴などからいくつかのまとまりに分けられる。そのうち第１群は鵜ケ島台式土器に含められるものである。第２群は茅山下層式土器に分類され、両群は共に胎土中に繊維を含んでいる。

また資料はすべてが破片からの復元によったため、器形復元をもとにさらに各部位に設けられた文様帯を記号化し、各資料の説明に便宜をあたえることにする（第４図）。また文様帯を単位として文様帯構成や、異なる個体間における相同の文様帯の比較によって本資料群に一定の型式学的な変遷を読み取ることもできる。

個々の資料の文様の説明には、基本的に文様の図形状の構図をモチーフと呼び、それを描くものを文様描線として、モチーフの内部にほどこされる文様を充填文と呼称することにする。個々の土器の特徴、型式学的なつながりは以上に設けた文様帯の成り立ちと、文様の分析から明らかにすることができるであろう。

本資料群を構成する個体群は大別して２つの形態から成る。Ａ類としたものは、胴部の上半



深鉢A類はⅡa－1、２帯が明確に分帯し、あいだに無文帯がめぐる。Ⅱa－1帯は突起から垂下する隆線に連結した刻みが分帯の目安となる。この部位に着目すると深鉢B－1類はⅡa－1帯が無文化しており、換わってⅡa－2帯が残存する。深鉢B－2類はⅡa－2帯が欠失し、Ⅱa－1帯のみが残る。基本的な流れは深鉢A類からB－2類へとつながるが、B－1類のような変化もあり、文様帯系統は単純ではない。しかし装飾の中心が上部に移動し、縮小する変化のもとに個体間のつながりがある。

第４図　茅山下層式深鉢の文様帯構成

に２段の屈曲部をもつもので、この屈曲部によって分帯された２段の文様をもつものである。これをⅡａ－１帯、Ⅱａ－２帯と呼称することにする。胴部以下は条痕のみとなるが、これも素文様帯（Ⅱｂ）とに区別しておく。

Ｂ類としたものは装飾が１段であり、Ｂ－１類は口縁に無文帯をもつ。Ｂ－２類はⅡａ－１帯のみが残存したものである。なお採集資料の底部はいずれも平底であることから、両群はいずれも平底の深鉢になるものと考えられる。

型式学的な推移の概要は深鉢Ａ類から深鉢Ｂ－１・２類への傾斜を示し、各類に特徴的な文様を描くものが存在する他、両者に共有される文様もあり、これらが相互に関連した推移を示すことを暗示している。胴部上半の有文部の文様帯の変遷の観点からは、深鉢Ａ類のⅡａ－１－２帯構成がＢ類においては文様の変化が進行し、胴上半部に一段の装飾帯が継承されることになる。以下に上述の分類に従って各資料の説明をおこなう。

第Ⅰ群（鵜ケ島台式土器）（第５図１～６）

本群はすべて小破片で全体の器形のわかるものがなく、図示した資料が全てである。山崎貝塚の土器群のなかで、その量は多くないが、モチーフや文様表出技法など個々の要素は後続する第Ⅱ群（茅山下層式土器）へ継承されるものが多い。

第５図１～６は沈線や微隆起線によりモチーフを描き、その内部に刺突文を充填する特徴のある一群である。いずれも小破片のみで、全体の器形のわかるものはない。

１～４は口縁部破片である。いずれも口縁部が角頭状を呈し、口唇部には刻みが施されている。

２は緩い波状口縁となり、胴部にかけて刻みのほどこされた１段の屈曲があり、Ⅱａ－１帯とⅡａ－２帯を分帯している。４は台形状の波状部である。３～６は円形の刺突文を施す特徴がある。１はこれと同様の効果をねらったハイガイの殻頂部の押捺がみられる。２は微隆起線の要所に押捺がみられ、同様の効果がある。

文様の描線は１の沈線をのぞいては微隆起線によるもので２は明確に貼付されたものであり、３～６は指頭による撫でにより隆起線をつくりだしたもの。

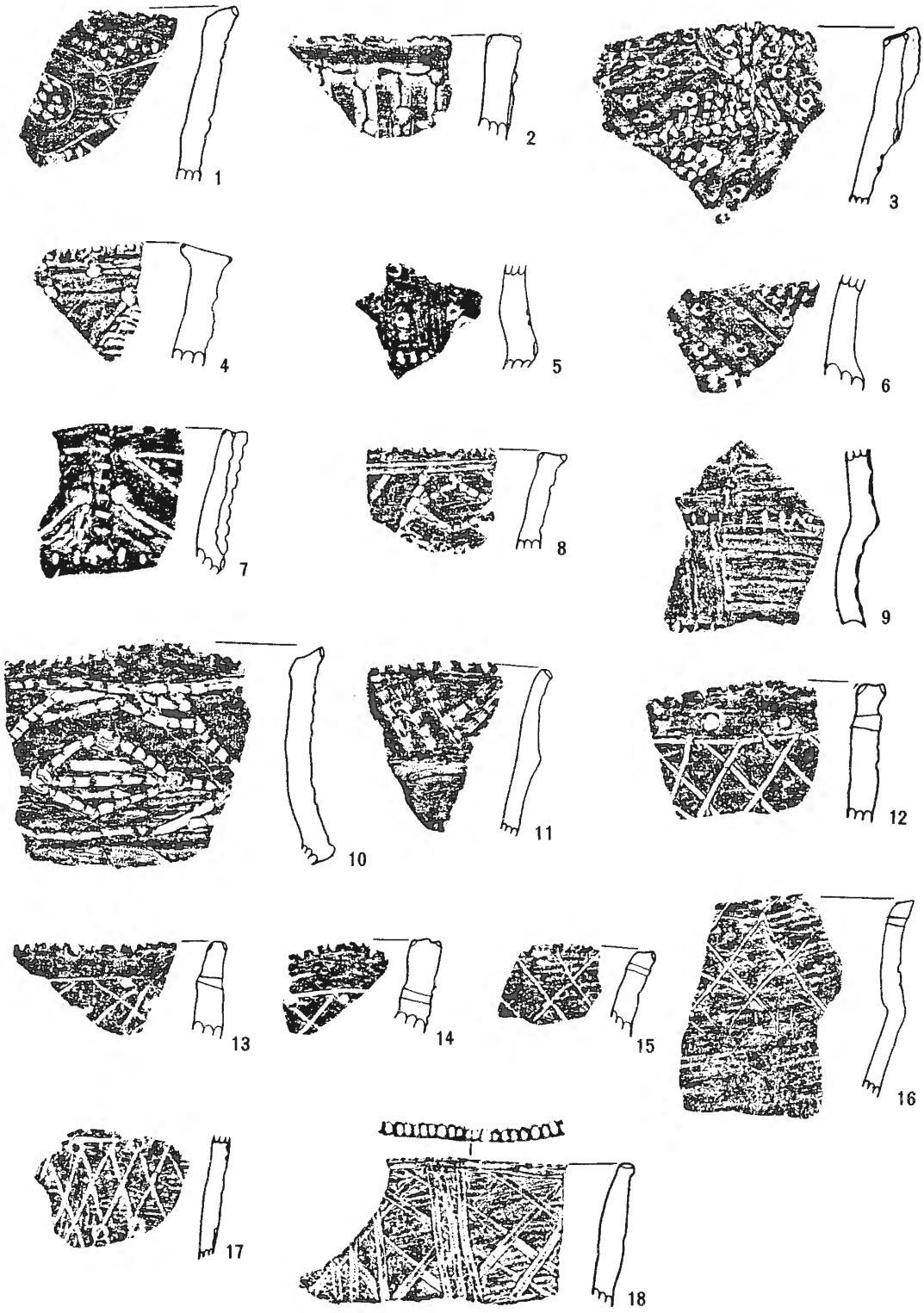
第Ⅱ群（茅山下層式土器）（第５図７～18、第６図19～25）

本群は微隆起線のみの文様表出をおこなう群（９）と沈線または微隆起線と充填文としての刺突文、そして円形刺突文を配し、複数の文様手法が一体となった群から成るもので、神奈川県鵜ケ島台遺跡を標識とする鵜ケ島台式土器の文様構成に良く一致した特徴をもつ。

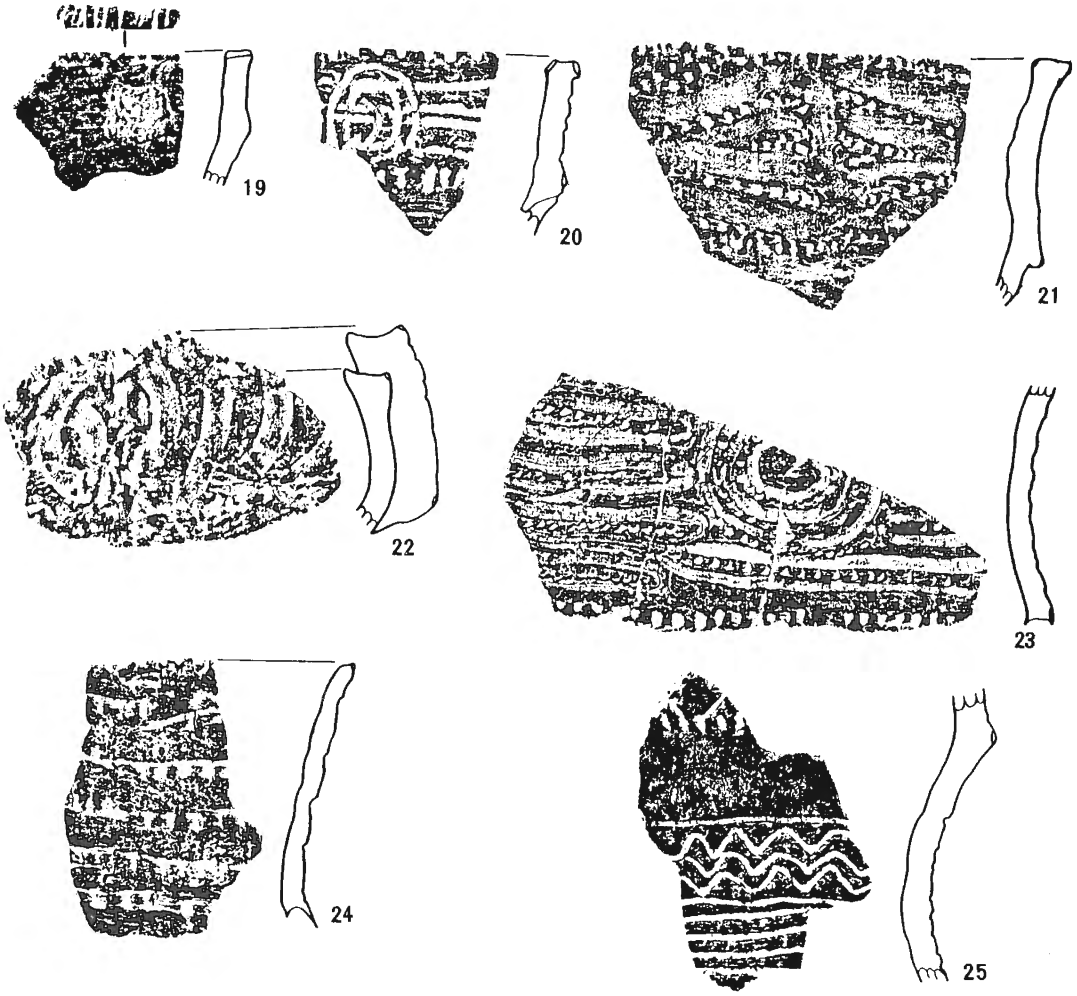
９はこの手法によった縦横の微隆起線を描く胴部破片であるが、ミミズ腫れ状の微隆起線が特徴的である。

山崎貝塚の主体をなす土器群であり、復元個体をふくめて豊富な資料がある。文様帯の構成と土器形態から先述した深鉢Ａ類とＢ－１・２類に分類され、さらに文様によって細別される。

第５図12～18は格子目文を描き、口縁下に一定の間隔で円孔が穿たれる。穿孔は焼成以前に



第５図　山崎貝塚出土土器（1）（½）



第６図　山崎貝塚出土土器（2）（½）

行われている。12～15・18は口縁部に刻みが施されており、角頭状の断面形態を呈する。条痕の明瞭に観察されるものは少なく、16は内外面共に条痕調整が行われていない。16は現存部から推すと深鉢Ｂ類に含まれる。

17は同様の格子目文を描く胴部であるが、格子目の交点に円形押圧文が施される。また18は同様の格子目文を描く他に、縦位の沈線が加えられたものである。

11は口縁部付近に連続刺突文による鋸歯状の文様が描かれた文様帯がある。以下は無文となるようである。20も同様の構成をとるものであるが、文様帯には横位の沈線と円文が描かれている。また屈曲部には刻みが施され、以下は条痕のみが残る。

19は同様の形態の無文土器で良く整形され、条痕調整は全くみられない。

21・24は連続刺突文を施すものである。21は指頭による凹線によりモチーフを描き、凹線のあいだに一列の細かな連続刺突文を施すもので、本遺跡ではこの資料のみである。破片の下部

の屈曲はⅡａ－１帯下端の分帯部分であろう。24は一定の間隔で横位の連続刺突文が施されるもので器厚が薄く指頭押圧が顕著であり、条痕はみられない。

22は波状口縁で波状部分には刻みを施す隆線が垂下し、これを中心に同心円状のモチーフが描かれる。波状部分や幅広の篦状工具による浅い沈線の原体などは第８図２と近似する。

25はⅡａ－１帯の下部からⅡａ－２帯の上半部にかけての破片で、分帯部分は屈曲し、そこに刻みが施される。Ⅱａ－２帯とのあいだには無文帯がある。Ⅱａ－２帯は上半部に波状文を描き、下半は横位の沈線のみが描かれる。条痕は内外面とも全く認められない。

23は太く浅い沈線により同心円と流水文風のモチーフが描かれ、沈線の間には細かい刺突文が施される。破片の下部に刻みが巡ることから、この部分が文様帯を分帯するのであろう。

第７図１は深鉢Ａ類としたものの一例でⅡａ－１と２帯の屈曲が大きく、その部分に刻みが加えられる。また文様も第１群の伝統を継承した個体である。各文様帯の文様に注目してみるとⅡａ－１帯は沈線によって区画された襷掛状のモチーフ内に連続刺突文が加えられ、無文部分は条痕が磨り消されている。こうした文様描線と充塡文様が一体となる文様の構成は第１群土器に通有のものである。

一方、Ⅱａ－２帯の文様は竹管状工具による沈線により格子目のモチーフが描かれ、それに沿うように、またはその内部に同様のモチーフが描かれたものであるが、沈線と刺突文の対応は不整であり、条痕を磨り消してモチーフを強調することはなく、条痕がそのままに残されている。

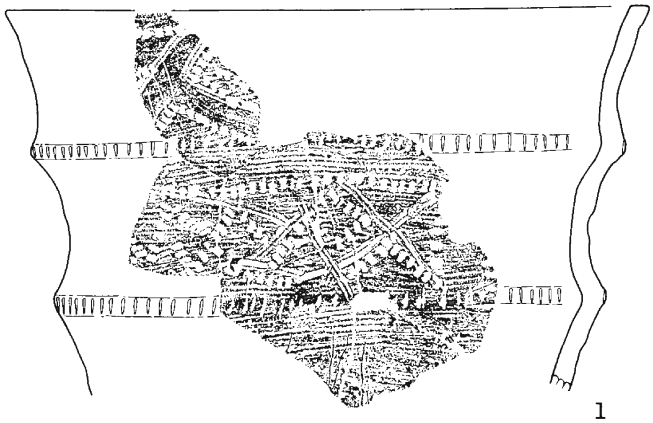
こうした観点からふたつの文様帯を比較すると、Ⅱａ－１帯に文様の中心が移動して、Ⅱａ－２帯の文様が次第に簡略化される傾向を読み取ることができよう。

第７図２は同様の形態と推測され、Ⅱａ－１帯が欠失している。先端が不揃いに切断されたヘラ状工具による連続刺突文によって幾何学的なモチーフを描く。第７図１の個体のⅡａ－２帯文様と構図が近似するが、文様描線の沈線が欠失している。

第５図８・10はこれと同一の連続刺突文による幾何学的な文様を描くもので、Ⅱａ－１帯の口縁部である。７も同様の部位であるが、刻みのある隆線が縦位にⅡａ－１帯を区分している。描線の沈線と内部の刺突文が組合わされた要所にハイガイの殻頂部の押捺がみられ、鵜ケ島台式に近似する。

第８図１・２は新聞の写真で発表された個体で江坂氏の論考（註10）にも茅山式の典型として引用された資料である。

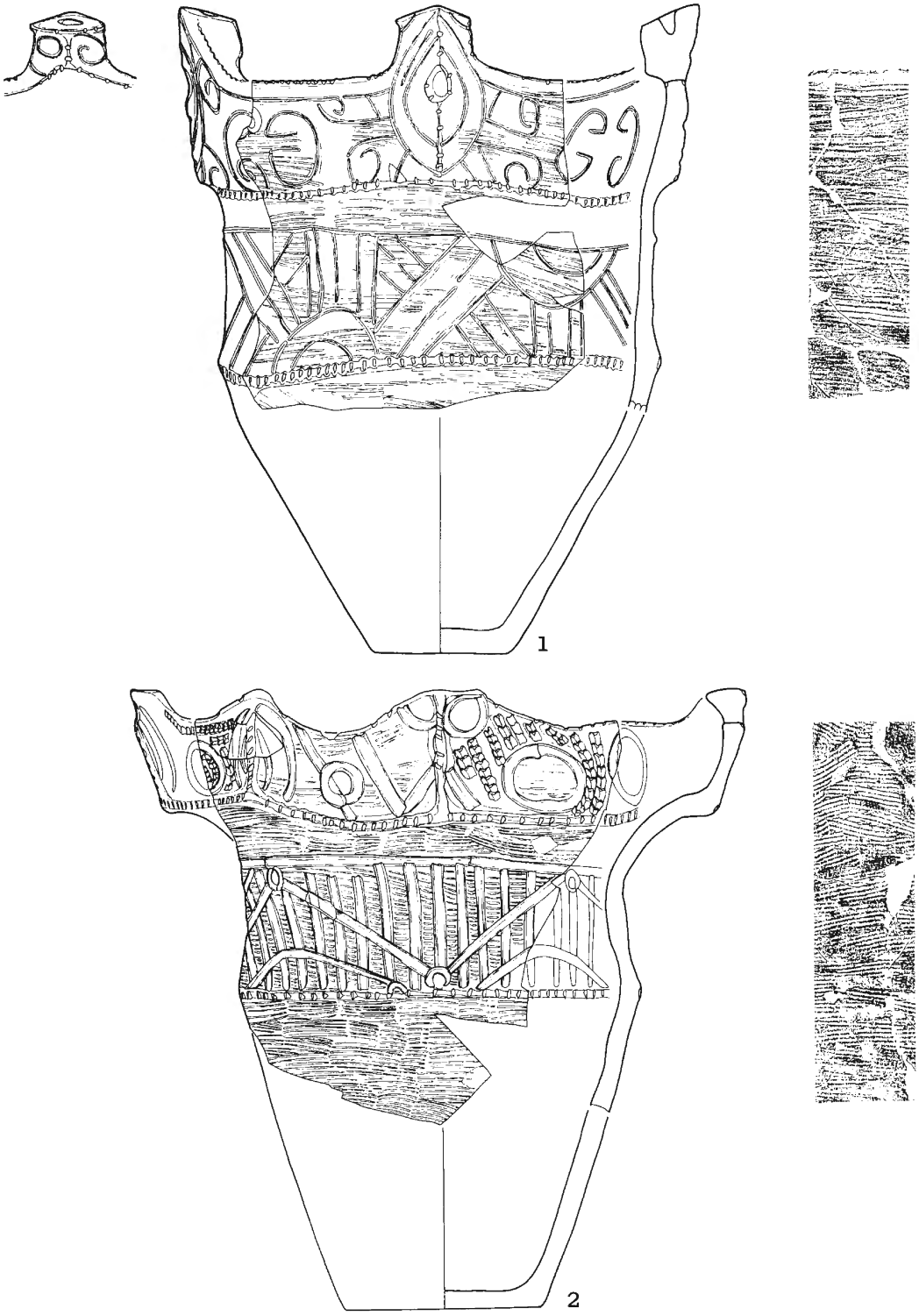
１は口縁部に円筒状の突起をもつもので、頂部に穴が穿たれているが貫通はしていない。また突起の内面には微隆起線による渦巻文が描かれている。突起の復元は２単位としたが、１対の可能性もある。Ⅱａ－１帯と２帯の区画が刻みをもつ隆線によって整然とおこなわれておりそれぞれⅡａ－１帯と２帯の上部には微隆起線による区画がおこなわれ、無文帯が形成されている。文様は微隆起線によるもので充塡文はない。



1

2

第７図　山崎貝塚出土土器（３）



第８図　山崎貝塚出土土器（４）

Ⅱａ－１帯の文様は微隆起線による渦巻文が各所に描かれ、全体として唐草文風の文様を構成している。円筒状の突起からは隆線が垂下し、その部分に刻みが施されており、その中心に楕円形の押捺がある。これを中心として２本の微隆起線が同心円状に描かれている。

一方、Ⅱａ－２帯は欅掛状のモチーフが微隆起線によって配され、また文様帯の上端と下端に２本の微隆起線による半円文が配されるもので、モチーフはⅡａ－１帯とは大きく異なる。文様帯内は条痕が磨り消された部分がある。内外面には浅い条痕が観察され、赤褐色を呈し焼成は良好である。

第８図２は２段の屈曲をもつ深鉢で、とくに口縁部が強く外反する。屈曲部分はいづれも刻みをもつ隆線がめぐり文様帯を分帯している。Ⅱａ－１と２帯のあいだには１と同様に無文帯が設けられている。口縁部は現存部分に２つの波状部があるが、互いに近接しており、また対象ではないために突起の全体の数は俄に決め難い。これらの突起は中心に縦位の刻みをもつ隆線が垂下する。この特徴は同図１の円筒状突起や６図22の口縁部破片や第８図１の個体とも共通している。

Ⅱａ－１帯は幅の広い切り口の平坦なヘラ状の工具によった浅い沈線によって、斜線と円形文を描き、その間に先端が２つ割れの工具による連続刺突文が充塡され、それ以外の部分の条痕は荒く磨り消されている。

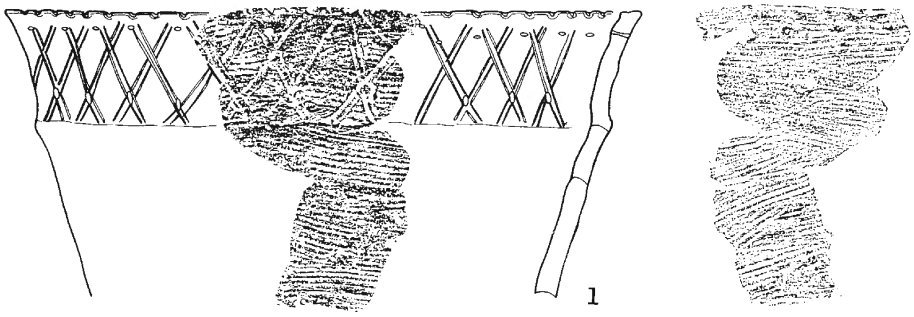
Ⅱａ－２帯は同様のヘラ状工具により文様帯上端の区画－縦位沈線－三角文の描出という手順で文様が描かれている。条痕は磨り消されず、下地に残されている。また三角文の頂部と連結部分には同様の原体によった円形文が描かれており、これは第１群（鵜ケ島台式土器）の円形刺突文と同様の効果をもつ。

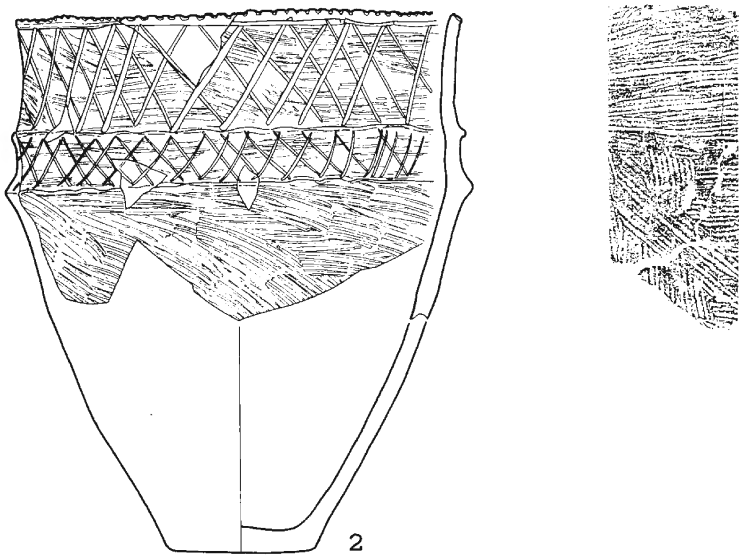
内外面には基本的に条痕調整がそのまま残されており、Ⅱａ－１帯の内部のみが磨り消されている。褐色を呈し焼成は良好である。

第９図１は深鉢Ｂ類に比定されⅡａ－１帯には半截竹管による併行沈線による格子目文が描かれる。また沈線の交点に円形刺突文が加えられている。

口縁部には刻みが加えられているほかにこの個体を特徴づける要素として、口縁下における円孔列がある。現存部分には４個が観察されるが、いずれも口縁下に一定の間隔で外面より内面にむかって細い棒状工具によって開けられている。穿孔は焼成以前におこなわれたもので、内面は孔の周囲が盛り上がっており、器体がまだ乾燥していない段階で施されたものである。また１個は貫通していない。これらの円孔列は外面の格子目文様と図形的に対応せず、その意味が装飾的なものか土器自体の機能に関係するものか、その意味はただちに決し難い。暗褐色を呈し焼成は悪い。

同様に円孔列のあるものはこのほかに第５図12～16の５個の破片がある。いずれも別個体に属するもので沈線により格子目文が描かれる。円孔はいずれも焼成以前に外側から行われてい





第９図　山崎貝塚出土土器（５）

る。こうした円孔列をもつ土器は山崎貝塚ではいずれも格子目文の土器に限定されており興味深い。

第９図２は深鉢Ａ類の格子目文の土器である。土器形態はⅡａ－２帯下端の分帯部分が大きく屈曲しており、Ⅱａ－１と２帯の分帯部分は屈曲というよりも、むしろ細く高い隆帯である。また口縁部には刻みが施されている。内外面には条痕がそのままに残されており、胴上部は横位に以下は斜位方向に施されている。先に指摘した格子目文土器におこなわれる円孔列は本個体にはみられない。色調は外面が黒褐色で内面が黄褐色である。

第10図１・２はともに深鉢Ｂ類である。１はⅡａ－１帯を分帯する屈曲部分に刻みがほどこされており、文様を描く以前に横位に施された条痕を消しており、部分的な条痕が残る。また内面の条痕調整は横位におこなわれ、条痕がそのままに残されている。文様は３～４本の細い沈線により縦位に文様帯を分割し、その内部に同様の沈線による上下に向かい合う半円文を描くもので、こうした文様の要所にハイガイの殻頂部圧痕が施されている。口縁部には刻みが施されているほか、横位の２～３本の細い沈線が巡る。この沈線の原体はハイガイの殻頂部を引きずったものらしい。暗褐色～赤褐色を呈し焼成は良好である。

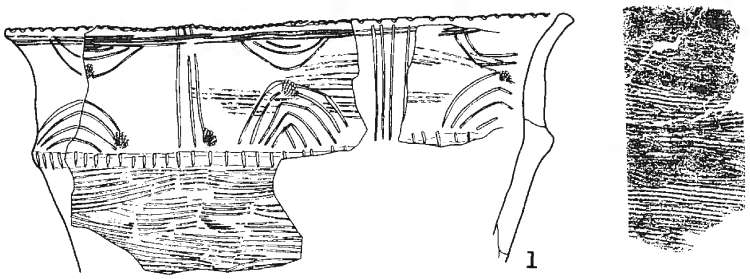
２は本貝塚出土資料のなかでもっとも現存部の多い個体で、口縁部は全周しており、胴部下半のみを欠失している。口縁部は４つの小突起がつけられ、口縁部には刻みが施されている。またこの突起の頂部は平坦に潰され、そこからⅡａ－１帯に連続する刻みを施す隆帯が垂下してⅡａ－１帯上端を区画する隆帯に接続している。

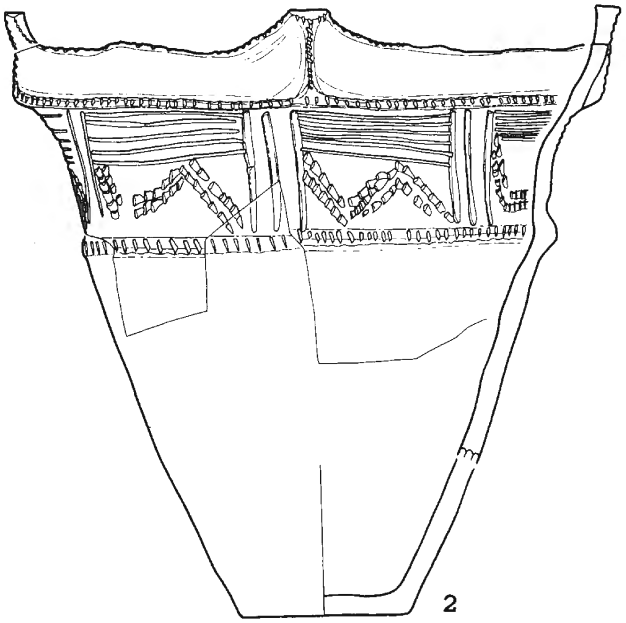
口縁部は幾分広い無文帯が設けられ、他の深鉢Ｂ類とは文様帯構成が少々異なる。Ⅱａ－１帯の下端は胴部の屈曲部に対応し、ここにも刻みが施されている。文様は三本の太い沈線によって文様帯を縦位に分割し、その上部に横位の５～６本の沈線を描いている。そして下半部には２列の連続刺突文によって鋸歯状文が描かれている。この文様の太い沈線と連続刺突文は、半截竹管様の同一原体と思われ、刺突は半截面で、そして太い沈線は同原体の背によったものであろう。文様帯内部を縦位に分割するなど基本的な文様構成は１の個体とよく似ている。

また、この個体を特徴づけるもうひとつの要素は、条痕調整が全く施されていないことである。器面は、内外面とも細かな擦痕が部分的にのこされるのみで、条痕を消した痕跡もみられない。同様に条痕調整を行わない資料は第６図16・25がある。黒～黒褐色を呈し、焼成は良好である。

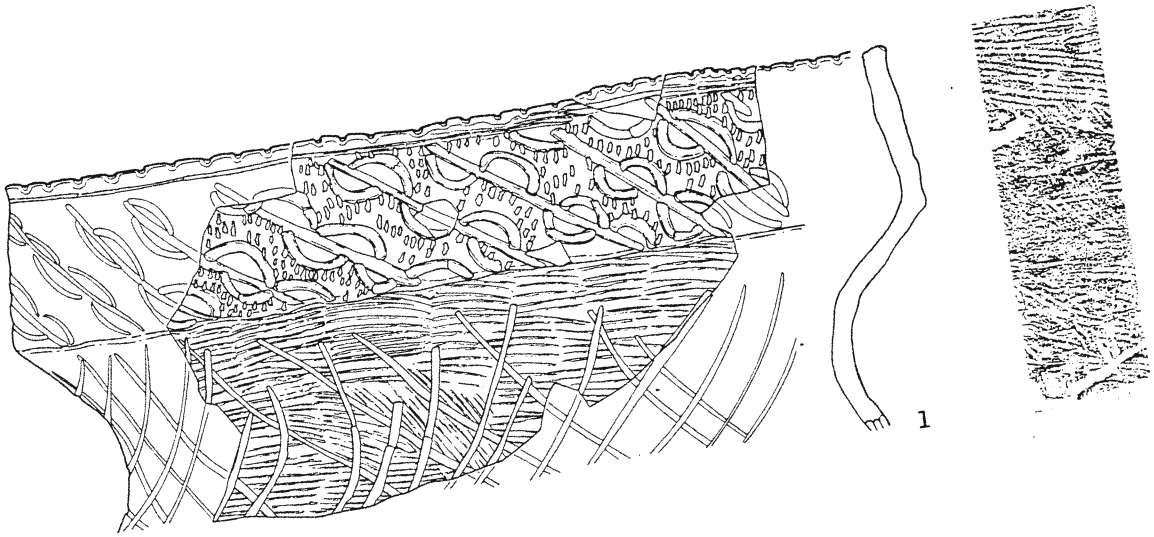
第11図１は深鉢Ａ類で他の個体に比べて大型で、口縁直径は推定で約40㎝を測る。口縁部は幾分内向して立ち上がり、Ⅱａ－２帯部分は大きく湾曲している。口縁部には刻みが施されている。Ⅱａ－１帯とⅡａ－２帯に描かれる文様はかなり異なるもので、Ⅱａ－１帯は斜位の沈線に半円文を繋げたモチーフを描き、この文様の間には刺突文が充塡されている。

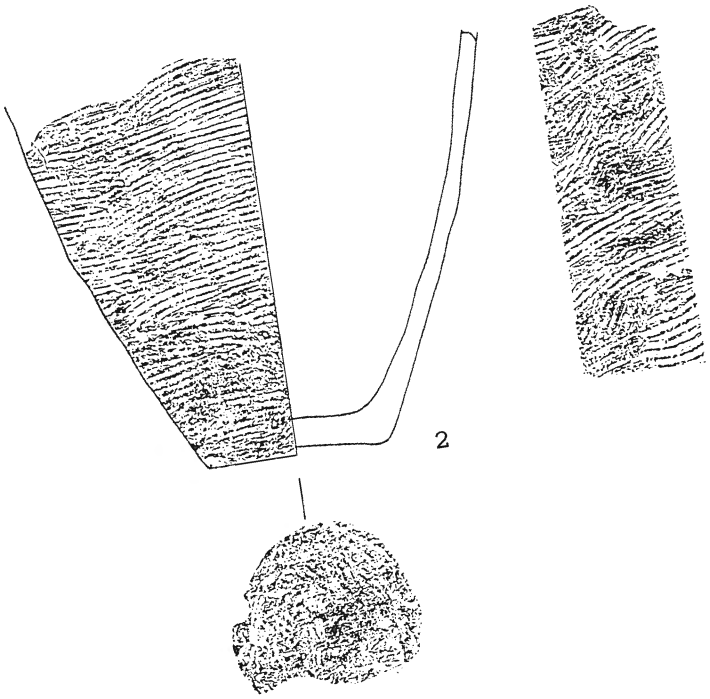
一方、Ⅱａ－２帯は横位の条痕が残され、太い沈線による格子目文が乱雑に描かれている。



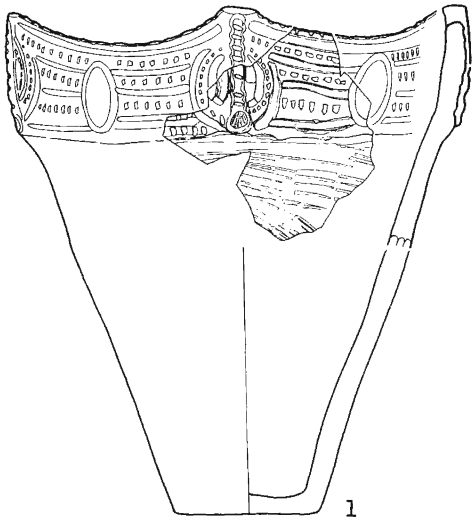


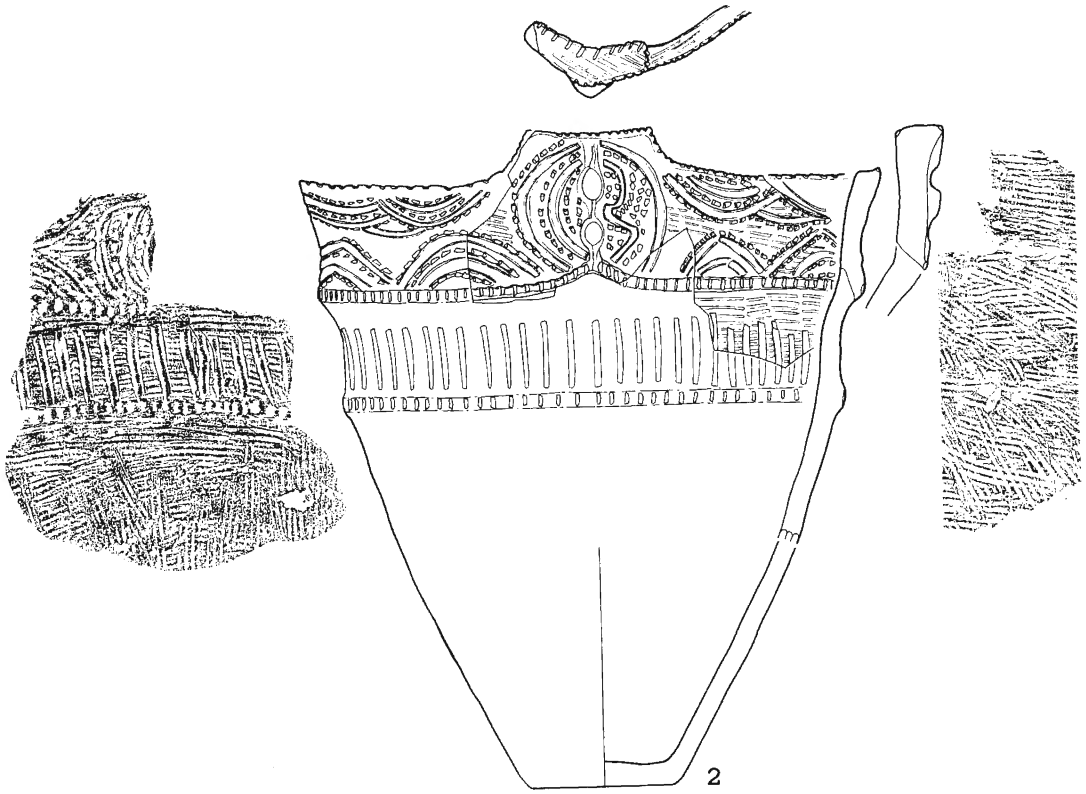
第10図　山崎貝塚出土土器（6）





第11図　山崎貝塚出土土器（7）





第12図　山崎貝塚出土土器（8）

内面は横位を主体とした条痕が残る。外面は黒褐色で内面は黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

同図2は平底の深鉢の胴下半部で、条痕が内外面に残されている。底面は幾分上げ底に作られているほか、繊維束の圧痕が観察される。

第12図1は深鉢B類で口縁部下に緩い段があり、胴部以下が緩くすぼまる。口縁の現存部は少ないが、波状口縁となろう。波頂部からは刻みを施す隆帯が垂下し、下端部にはハイガイの殻頂部圧痕が施されている。

波状数は4に復元したが2山の可能性もある。口縁部には刻みが巡り、Ⅱa－1帯は横位の沈線が4本引かれ各間に列点文を充塡する。現存部が少ないが、波状部の間には円形のモチーフが描かれていたようである。内外面には浅い条痕の残る部分があるが、大半は良く消されている。黒褐色を呈し、焼成は脆い。

同図2は1と同様の文様表出技法をとる深鉢B類である。Ⅱa－1帯と2帯に描かれる文様はかなり異なるもので、Ⅱa－1帯に装飾の中心がある。台形状の突起をもつ波状口縁であるが、現存する口縁部の文様の展開からは2単位に復元された。また口縁部の上面観は突起部が幾分角張り、正円を成さない。突起が2と推定すると、上面観は楕円形に近くなろう。

口縁部には刻みが施され、突起の中心には1本の隆線が垂下し、Ⅱa－1帯の下端を分帯する屈曲部の隆線と接続する。また、隆帯上には2つの円形の押圧が施されている。

Ⅱa－1帯の文様はこの突起を中心とした同心円状のモチーフと、半截竹管により文様帯の上下に接続する半円形のモチーフが連続して描かれ、各間に列点が施されるもので、同図1のⅡa－1帯と同様である。条痕は下地にそのままに残されている。Ⅱa－2帯は上下端を刻みが施された隆帯で分帯している。横位の条痕がそのままに残され、その上に半截竹管の背を用いた太い沈線により縦位の沈線が描かれている。

胴部下半は条痕がそのままに残され、横位の条痕の後に縦位に施す部分がある。また、内面はⅡa－2帯付近を境として上部は横位に、以下は横位のあとに縦位に施され、格子目状にみえる。外面は黒～暗褐色。内面は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

Ⅴ　山崎貝塚出土土器群の型式学的位相

前節において述べてきたように、本貝塚の土器群は型式学的に鵜ケ島台式から茅山下層式に対応するものであり、主体をしめるものは茅山下層式土器である。これらは文様帯を単位とした観察によって、個々の要素が相互に良く連続することが理解され、そうした事実は本貝塚の形成時期を知る重要な手がかりともなる。

本遺跡の周辺地域には先述したように、当該期の遺跡が多く分布しているが、そうした遺跡から出土する土器群はいくらかの年代差を示すとともに、条痕文系土器群の変遷をたどる良好

な資料を提供している。ここではそうしたいくつかの遺跡の土器群との比較と対応をしめし、本遺跡の土器群の位置づけを考えてみることにする（第13図）。

条痕文系土器群の初頭には子母口式土器が位置づけられているが、その資料は未だ少なく、型式の内容が明確化されていないが、椎ノ木遺跡は数少ないこの時期の集落址である（註11）。

絡条体圧痕文と貝殻腹縁文、細隆起線文、刺突文を特徴とする子母口式土器の新しい部分を主体とした土器群が大量に出土している。

後続する野島式土器は駒込遺跡でまとまった出土があるが、子母口式土器とのあいだを繋ぐ資料はなお少ない。絡条体圧痕文は野島式の古い部分まで継承されるが、関東東部から東北南部地域では口唇部と口縁部周辺に施文が集中する。茨城県常陸伏見遺跡や近接する成田市木の根遺跡では、口唇部に絡条体圧痕文を施文した微隆起線の土器があり、こうした土器群がその間をうめるらしい。同様の土器は少ないが印旛村吉田馬々台遺跡にもある（註12）。

野島式土器は先述の駒込遺跡では、鵜ケ島台式土器への連続を暗示する土器がある。

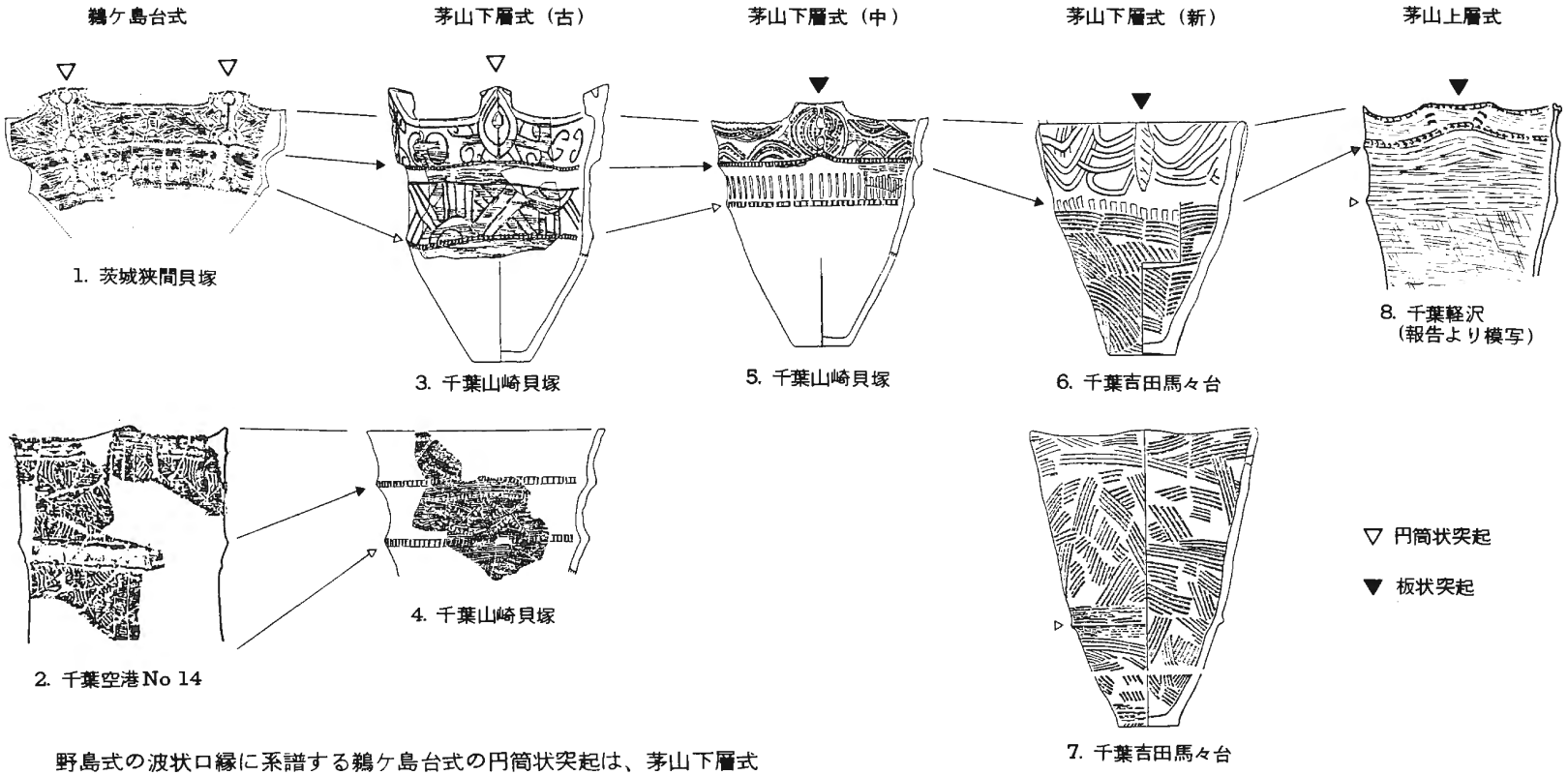
鵜ケ島台式土器は破片資料が多いが、この他に上座貝塚・間野台貝塚・三日月山貝塚・後口遺跡・大崎台遺跡にある。鵜ケ島台式土器を主体的に出土した遺跡は少ないが、茅山下層式土器を主体とする遺跡には少なからず出土がみとめられ、こうした遺跡の形成期間を示唆している。

そして茅山下層土器はもっとも多くの遺跡で出土している条痕文土器といえ、当地域の条痕文期の遺跡の主体を成すものである。また、当該土器型式の研究は鵜ケ島台式とあいまって近年になって成果の蓄積がおこなわれつつある（新井1978、関野1980・1983、野口1982等）。ここではそうした諸論に検討を加える余地はないが、これらの研究の成果をふまえて本遺跡の資料を観察してみよう。

山崎貝塚の土器群における鵜ケ島台式土器（第１群）から茅山下層式土器（第２群）への変遷は、先述したように深鉢Ａ類とＢ類の変化として示すことができるが、実際の両型式の変遷は複雑で単系な変化では型式の区分の指標とはならない。その変化は漸移的な移行をしめすものであるが、２段の有文部をもつ深鉢Ａ類もⅡａ－１帯とⅡａ－２帯の文様の観察から、装飾の中心が次第にⅡａ－１帯に移り、連動してⅡａ－２帯の簡略化が進行するといった変化の方向性を山崎貝塚の深鉢Ａ類は伝えている。

この変化を示す比較的古い段階は第７図１の個体であり、鵜ケ島台式土器の文様帯の継承の変質を暗示する。この個体のⅡａ－２帯は文様描線の沈線と充塡文としての刺突文が次第に対応しなくなる過程を示し、こうした段階を経て刺突文のみによる文様が描かれるようになるらしい。同図２の個体は刺突文のみの装飾をおこなうもので、そのモチーフが１のⅡａ－２帯と近似するのは偶然ではあるまい。

また、やや細かな特徴であるが、１のⅡａ－２帯の上端部は屈曲部分とのあいだに、条痕の



野島式の波状口縁に系譜する鵜ケ島台式の円筒状突起は、茅山下層式の段階で板状の扇形突起に変化する。茅山上層式への継承は突起の頂部が平坦化し、断面がT字またはY字状に変化する。突起の変遷は中央部に垂下する隆線に着目すると胴部の刻みを施す屈曲部に接続し、これがⅡa－1帯の下端の区画となっており、文様帯の変遷と連動している。

第13図　円筒状突起をもつ深鉢の型式組列（案）

みをのこす無文帯がめぐるもので、こうした無文部をもつものは鵜ケ島台式土器のⅡa－2帯にある。同様に茅山下層式土器の古い部分に対応するものはこの他に第8図1および2がある。1と2の個体は相当にことなる文様を描くが、器形や文様帯構成は良く一致している。そして先述したようにⅡa－2帯上端に一定の幅で無文帯が巡る特徴も良く一致している。1はミミズ腫れ状の細隆起線が描線となり、2は幅広の箆状工具による浅い沈線が描線となるが、Ⅱa－2帯の幾何学的なモチーフの骨格は基本的に良く似ている。

両者の在り方は、むしろ型式学的な年代差よりも基本的な文様構成の対応を保つ複数の文様系列の存在を暗示するものと考えられる。そうした視点をもとにすると、少なくとも微隆起線文（第8図1）と太い刺突文と沈線を加えるもの（第8図2）、細い連続刺突文（第5図8）、沈線文と列点文を加えるもの（第12図2）という系列の文様表出技法が存在するようである。

第8図1の個体は口縁部に付けられた円筒状の突起が特徴のひとつとなるが、頂部に孔をもち、正面観は垂下する隆線と円形押圧を中心に同心円文が微隆起線によって描かれる。
こうした特徴は鵜ケ島台式から茅山下層式にかけて発達し、それは茅山上層式の波状口縁へと継承される（第13図）。文様はすべて微隆起線によるもので充塡文は用いられない。
また、この時期に文様描線の交点におこなわれる円形刺突文がない。文様帯の分帯が刻みをもつ隆線によっていることや、Ⅱa－2帯上端に無文帯をもつことなど、茅山下層式の古い部分と基本的な構成が対応しており、この段階に対応するものと考えておく。類例の検出をまってその位相に触れたいと思う。この個体の円筒状突起は第12図1・2の台形状の波状部と構成が対応している。円筒状から板状に変化しているが、正面観の中心に隆線が垂下し、これを中心として同心円状のモチーフを描く構成は両者の連続を暗示しよう。この突起は茅山上層式では四街道市軽沢遺跡例（第13図8）に継承される。

鵜ケ島台式にはじまるこうした突起をもつ深鉢の系列は、当該期の有文土器の中では安定した存在であり、当該土器群の系列的、年代的な動向の詳細を解明する上で有効な対象となろう。山崎貝塚のなかでは、先述したように第8図1を古い部分として第12図1・2へと変遷し、茅山下層式土器の新しい部分で、吉田馬々台遺跡の個体のように文様の退化とともに、刻みを施す粘土紐の貼付に変化し、軽沢遺跡の茅山上層式土器へと変遷するものと推察される。吉田馬々台遺跡はこうした変遷においては微妙な段階であるが、口縁の隆線が刻みによることや、Ⅱa－1帯の文様が残存することを評価点として茅山下層式のもっとも新しい部分と考える。

突起が隆線の貼付のみとなり、波状部から隆線が垂れ下がり、隆線上に指頭押圧を施すものは茅山貝塚の茅山上層式土器にあるが、同様の資料は四街道市後口遺跡採集資料にある（註13）。したがって円筒状突起をもつ土器変遷を視野に置くと、茅山下層式土器に大きく3つの段階を想定することができる。

第12図1・2の段階はその個体の文様が示すように沈線と列点が併用され、曲線的なモチー

フを構成する段階であり、こうした文様表出技法は鵜ケ島台式土器の文様の変質を示す、より新出の要素となろう。また凹線文といわれる文様も幅広の篦状工具によるものが圧倒的に多く、なかには関東西南部や東海地方のものとかなり異なるものがある。指頭による凹線文は山崎貝塚ではわずか1点のみである（第6図21）。また、茅山下層式に一定量存在するという縄文施文の土器も当地域では未見であり、こうした文様表出技法の違いに茅山下層式土器の地域的特徴が内在するものと推測される。

なお、形態や文様などの特徴以外にこの時期に条痕調整を全く行わない土器が存在する。第10図2などがその好例であるが、多くの遺跡で少数が伴うらしく、こうした整形の土器のみが主体を成す土器群を筆者はいまだ知らない。型式内の土器組成として捉えなおす問題かもしれない。

Ⅵ　ま　と　め

山崎貝塚が発掘された昭和14年前後の時期、印旛沼地域の考古学的調査にはめざましいものがあった。この地域は明治年間より八木奨三郎・下村三四吉をはじめとする多くの研究者による成果の蓄積があった。昭和初年より酒詰仲男・和島誠一・池上啓介・甲野勇らによって縄文時代より歴史時代にいたるまでの遺跡の詳細な分布調査がおこなわれ、そのうちのいくつかには発掘調査が試みられた。

山崎貝塚の調査された昭和14年には、和島誠一らによって条痕文期の貝塚である間野台貝塚の調査がおこなわれた。同年に発見された山崎貝塚は、そうした当時の活況を呈した地域研究の動静を反映したものと思われる。数日にわたっておこなわれた調査は、残された遺物から想像すると大きな成果をおさめたものと思われる。ただ惜しまれるのはそうした遺物が公表の機会を持たなかったことと、出土地点や状況が記録として現在に残されていないことである。しかし今回の踏査によって遺跡は残された山林内に展開し、遺構が残存することが明らかにされた。

先学の研究を継承するとともにその推進を計画し、こうした埋没した資料を公表していくことも我々の重要な仕事であると思うのである。

山崎貝塚の土器群はいままでに述べてきたように、鵜ケ島台式土器から茅山下層式土器までを含み、その主体は茅山下層式土器であった。資料の中には白色のカルシウムの付着したものが多く観られるが、それは茅山下層式土器に限られていた。山崎貝塚の規模や堆積状況は不明であるが、こうしたことから貝層の時期は茅山下層式期と推測される。また、このことは崩落土砂の一部に確認できた貝の散布地点で茅山下層式土器が採集された事実からも指摘されよう。

茅山下層式土器は型式学的に古い部分と新しい部分に分けることができ、そうした成果は今後より豊富な土器群を対象として、型式学的・層位学的な検証が加えられなければなるまい。そうした課題を確認し、今後の分析に備えたい。

あとがき

筆者が山崎貝塚出土の遺物の存在を知ったのは1981年のことであった。千葉市加曽利貝塚博物館で別の資料分析をおこなっていたとき、偶然にも目にふれたこれらの資料を公表すべく機会を待ったが筆者の怠慢で遅れてしまった。

遺跡の所在を調査するために佐倉市教育委員会の川嶋英彦氏にお世話頂き、また、印旛沼周辺の考古学的調査を推進されてきた市内在住の北詰栄男氏から遺跡の具体的な位置や当時の状況、周辺遺跡の情報など実に有益な御助言を頂くことができた。資料の公表に際しては、千葉市立加曽利貝塚博物館の庄司克氏に御世話になった。

また、遺跡の踏査や遺物整理では明治大学考古学専攻生の田中貴美子・馬場信子・須賀博子田嶋慎治氏の御協力があった。こうした方々の協力なしには本稿をまとめることはできなかったものと思う。御多忙にもかかわらず、多くの助言や助力を頂いた方々に感謝の意を表したい。

1990. 1. 13　　明治大学大学院博士課程

註　参考文献

註1　佐倉市教育委員会1985

註2　伊藤1958. 金子1960

註3　酒詰1948

註4　麻生1959

註5　桑原1974

註6　田川1975

註7　四街道市教育委員会1982、筆者らが1980年に踏査した時に新たに発見された貝塚で、台地上は広範囲に条痕文土器が散布しており、2個所の地点貝塚が発見され、1個所は畑地に掘られた穴の断面にハイガイ・ハマグリ・カキを主体とした貝層の堆積が観察できた。また、貝層より採集された土器は茅山上層式土器であった。

註8　金子1960　現状は市営住宅下となっているが、周囲の削平断面には炉穴や貝塚が埋存しているという（北詰栄男氏教示）。

註9　柿沼1987

註10　江坂1955

註11　川端1990

註12　古内1980

註13　四街道市教育委員会1982。1980年踏査の際に露出した貝層中より採集されたもの。詳細は後日に発表する機会をもちたい。

赤星直忠　1948　「神奈川県野島貝塚」考古学集刊第１冊　東京考古学会
〃　1957　「茅山貝塚」横須賀市立博物館研究報告第１号
麻生　優　1959　「佐倉市上座貝塚発見の住居址と炉穴」駿台史学第９号
阿部芳郎　1989　「第Ⅱ群１類土器の型式学的検討」『半蔵窪遺跡調査報告書』
〃　〃　「第Ⅱ群２類土器の型式学的検討」『半蔵窪遺跡調査報告書』
〃　1990　「古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の型式学的検討」古屋敷遺跡調査報告書（予定稿）
新井和之　1978　「千葉県佐倉市上座貝塚出土土器について」奈和第16号
〃　1986　『平賀』印旛村教育委員会
伊藤和夫他　1958　『千葉県石器時代地名表』
江坂輝弥　1955　「貝殻条痕文土器文化の展開」『縄文土器文化研究序説』六興出版
岡本　勇　1959　「三浦市鵜ケ島台遺跡」横須賀市立博物館報告６
〃　1982　『縄文土器大成・１早期、前期・関東地方』講談社
小川和博　1981　「子母口式土器についての覚書」奈和第19号
柿沼修平　1987　「大崎台遺跡調査報告Ⅲ」佐倉市大崎台Ｂ地区遺跡調査会
金子浩昌　1960　『印旛・手賀』
川端弘士他　1990　『椎の木』印旛郡市埋蔵文化財センター
喜多圭介・中野修秀　1988　「千葉県佐倉市間野台貝塚の研究」奈和第26号
桑原　護他　1974　「飯重新畑遺跡」『飯重』所収　佐倉市教育委員会
〃　1977　『間野台・古屋敷』佐倉市教育委員会
甲野　勇　1948　「千葉県印旛郡地方石器時代遺跡調査」考古学雑誌第29巻７号
笠間和義　1957　「千葉県佐倉市上座貝塚」ミクロリス第15号
佐々木克典　1980　「縄文時代早期の遺構と遺物」『神谷原』
関野哲夫　1980　「鵜ケ島台式土器細分への覚え書き」『古代探叢』
〃　1983　「茅山下層式土器について」古代80号
酒詰仲男　1948　「千葉県印旛郡地方遺跡概説」人類学雑誌第54巻第８号
佐倉市教育委員会編　1985　「千葉県佐倉市文化財分布地図」
杉原荘介　1957　「神奈川県夏島貝塚における早期初頭の文化」明治大学文学部研究室報告２
瀬川裕一郎　1982　「子母口式土器再考」沼津市歴史民俗資料館紀要６
〃　1983　「野島式土器に関する２～３の覚書」沼津市歴史民俗資料館紀要７
西川博孝　1978　『千葉県船橋市飛の台貝塚発掘調査概報』飛の台貝塚発掘調査団
〃　1981　「縄文時代の遺構と遺物」『新東京国際空港埋蔵文化財報告書Ⅳ』
田川　良他　1975　「石神第１地点」『臼井南』所収　佐倉市教育委員会
高橋良治他　1906　「千葉県海老内台遺跡群の調査報告」下総考古学２　下総考古学研究会
戸沢充則他　1974　「美濃輪台遺跡Ａ地点（貝塚）」市立市川博物館研究調査報告１冊　市立市川博物館
野口行雄　1982　「№14遺跡」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
宮　重行他　1981　『木の根－№６遺跡』千葉県埋蔵文化財センター
古内　茂　1980　『吉田馬々台遺跡』印旛村教育委員会
山内清男　1930　「関東北における繊維土器追加第３」史前学雑誌第２巻３号
〃　1941　『日本先史土器図譜』Ⅶ
四街道市教育委員会　1982　「千葉県四街道市埋蔵文化財分布地図」
和島誠一　1948　「印旛沼沿岸における縄文式四遺跡の発掘」人類学雑誌第54巻11号